



キングペンギン

大きな水槽の中をスイスイと泳ぐペンギンたちを見ていたら、太古の昔、空を飛んでいたという説がすんなり信じられるような気がした。

長崎にペンギンがやって来たのは今から約六十年前。長崎ペンギン水族館の前身となる長崎水族館ではキングペンギンの世界最長飼育記録（三十九年九カ月）をはじめ、世界初の取り組みが数多く行われていた。その遺伝子を受け継ぎ二〇〇一年に開館した長崎ペンギン水族館では、世界初のイベントとなる「ふれあいペンギンビーチ」を開催。フンボルトペンギンたちが海を泳ぎ、砂浜を歩く姿を公開するこのイベントは子どもたちに大人気だ。

現在、長崎ペンギン水族館に展示されているのは、八種・百六十三羽。食事は基本的に「マアジを与え、「腹八分」を守っているという。自然界より運動量の少ない水族館では食事の量の調整が必要とのことだが、どうやってそれぞれのペンギンが食べる量を把握しているのだろうか。飼育員の村越未未（むらこし）さんは「私たちは全ての個体の見分けがつけます。中には他の子にエサを取られる子もいますから、飼育員は『この子は食べた、この子はまだ』と、観察しながら魚をあげているんです。適当に放り投げているように見えて、意外と真剣勝負なんですよ」。

ペンギンは基本的に一夫一婦制。しかし人間が繁殖のために組んだペアは、すぐに解消することが多いという。「やはり自然に出来たペアの方が長続きするんです。恋愛をしているんでしょうね（笑）。面白いのは、甲斐性がないオスは振られてしまうということです。ジェンツーペンギンは小石で巣を作りますが、この石を全く集めようとしないオスは、メスから逃げられてしまいます」。

村越さんは、ペンギンのプライドについても教えてくれた。「以前、高齢のためにエサを上手く飲み込めない子がいて、喉にチューブを入れようとしたのですが、その時の抵抗が激しくて。まるで『人間の世話にはならないぞ！』と言っているように思えました。結局、その子は亡くなるまで自分でエサを食べ続けました。飼育されていても、野生のプライドを失うことはないのだと思います」。

展示場ではキングペンギンが、親から離れたところにいるジェンツーペンギンのヒナを見守っていた。私たちがペンギンから学ぶことは多いのかもしれない。

※取材時（十月下旬）の数

土日・祝日に開催されている「ふれあいペンギンビーチ」。



「私たちと同様、ペンギンも飼育員を見分けているんですよ」と村越さん。

フンボルトペンギン



ペンギン

観察すればするほど面白い。ユーモラスな動きにも注目！